

栗田城址

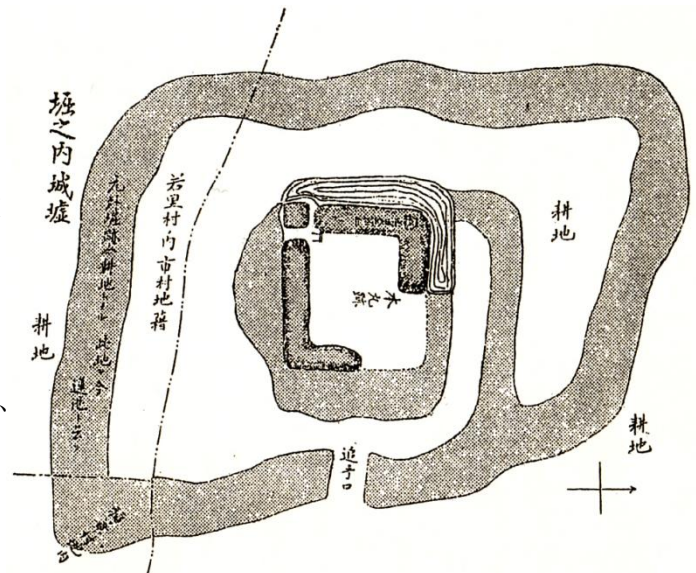
(堀之内城址)



概要

栗田城（別名：堀之内城）址は、長野市では最大規模の中世の館跡の一つであり、鎌倉時代から戦国時代にかけての約 400 年間の長きにわたり、この地域を支配していたとされる、村上氏一族を源流とする豪族・栗田氏の居館の跡である。

現在、「水内総社日吉大神社」（通称：日吉神社）がある場所一帯が、かつてこの城の本郭だった所であり、同神社の本殿が建つ高台が、当時築かれた土塁の遺構である。後世に設けられた石垣や階段で、旧状は大分損なわれてはいるものの、その規模は近在に類を見ないものであり、往時の繁栄ぶりを今に伝えている。



『長野県町村誌 北信篇』（長野県編 1936 年）に掲載されている「堀之内城墟」の図

歴史的経緯

昭和 11 年（1936 年）に長野県が編集した『長野県町村誌 北信篇』の「栗田村」の「古跡」の項には「堀之内城墟」として、次のとおり記されている。 ※ 文中（ ）内は編者注

村の中央東番場耕地にあり、東西六丁三十間餘（約 702m）、南北十丁（約 1,080m）回字形を爲す、本丸跡方百二十間（約 216m）西北に曲りて高さ五間（約 9m）東西十七間三尺（約 31.5m）の築堤あり、此處に村社栗田大元神社を奉齋す。此地の西より北へ繞りて、幅六間餘（約 10.8m）長さ三十七間餘（約 66.6m）の堀あり、南方外曲輪の地は若里村の内市村組に屬す外堀跡を今字蓮堀と稱す栗田氏代々の居城地たり。村上判官代為國の後胤栗田寺法橋禪門寛覺戸隱別當となり、其子栗田寺寛明戸隱善光寺兩別當に補せらる、明應、永正中（1492 年～1520 年）栗田氏村上氏の幕下となり、同（天文？）廿二年（1553 年）村上義清武田晴信と戦ひ敗れて越後に奔り上杉氏に據る。栗田寛安武田氏に屬し六十騎の將となる、其男鶴壽天正九年（1581 年）遠州高天神城に戦死す、其男永壽同十年（1582 年）三月武田氏滅亡の後森長可に屬し同七月上杉景勝に降る、其子寛慶同十五年（1587 年）栗田寺を長野箱清水の地に移し、寛慶寺と改め退隱す、後其遺跡子孫の事實を詳にせず。年號干支不詳、城地廢毀の後開墾して一村落をなし或は耕地となりて其形跡を僅に遺すのみ。

* 鎌倉時代以前

『長野県町村誌』の文中にあるとおり、栗田氏は清和源氏村上系の一族と伝えられる。同文中「栗田寺法橋禪門寛覺」は、戸隱神社の第 25 代別當であり（注：「別當」とは鎌倉時代以前の職制の一種で、今で言えば各種役所の長に相当し、有官の人が別にその職に当ることから、こう呼称されたもの）、鎌倉幕府の記録書である『吾妻鏡』に、治承 4 年（1180 年）に木曾義仲が麻績を攻撃した際、救援に出兵した平家方の笠原頼直を迎撃し戦った武将として名が出てくる栗田寺別當の「範覺」と同一人と見られている。

また、栗田氏には戸隱神社を支配する「山栗田」と善光寺を支配する「里栗田」がいたことが知られており、上記文中には、寛覺の記事に引き続き「其子栗田寺寛明戸隱善光寺兩別當に補せらる」との記述があるが、この頃には既に「山」と「里」とが生じていたものであろう。栗田城は言うまでもなく「里栗田」の本拠である。

* 室町時代

栗田城の名が初めて史料上に見えるのは、南北朝の争乱時代の応安3年(=建徳元年、1370年)10月の「藤井下野入道代上遠野(かどの)政行軍忠状」(上遠野文書)であり、それによると、この年10月、信濃守護・上杉朝房の軍勢が反守護方(南朝方)であった村上一族の栗田氏を攻め、栗田城の西木戸口で交戦している。和田博氏はこの戦があった事実を「この附近が交通上の要衝であった証左」であるとするとともに、「栗田氏がここを本拠としたのは、村上勢力の犀川以北進出の足場でもあった」としている。(長野市の埋蔵文化財第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』長野市教育委員会1991による。)

その後、室町幕府の守護による支配をきらい、犀川流域を基盤とする信濃の有力豪族が「大文字一揆」を結成して対抗した際の構成員として、応永26年(1419年)の「大文字一揆注進状」に「栗田沙弥覚秀」の名が見えており、それに先立つ応永7年(1400年)の「大塔合戦」にも、栗田氏は関係したものと思われる。(もっとも、この合戦の軍記物として知られる『大塔物語』には、栗田氏の名は認められない。)



栗田氏に攻められ衰亡した漆田氏の居館跡と伝えられる「御所天満宮」(長野市中御所)

また、鎌倉公方・足利持氏が永享10年(1438年)に幕府方と争い敗れた「永享の乱」の後、永享12年(1440年)に結城氏朝が持氏の遺児を奉じて下総(茨城県)の結城城に立て籠もり、幕府方と争った「結城合戦」の際には、信濃から多くの武士が結城城攻めに馳せ参じている中、栗田氏は名代を立て、直接参陣はしていない模様である。(『結城陣番帳』によれば「九番 栗田殿代 井上孫次郎殿」とある。)

その後、文明9年(1477年)、裾花川からの取水をめぐる水争い等に端を発し、栗田の西に隣接する漆田郷(現在の中御所)の漆田秀豊と争った際には、栗田氏は漆田城を攻略して勝利を得ている。(『諏訪御符札之古書』に「此年八月、漆田城被責一騎、城於栗田江被渡候」とある。)

* 戦国時代

栗田氏の歴史上のハイライトは、戦国時代の弘治元年(1555年)、甲斐(山梨県)の武田信玄と越後(新潟県)の上杉謙信の両軍が犀川を隔てて争った「第2回川中島合戦」における活躍であろう。

この時、栗田氏は武田方に属し、善光寺堂主の栗田鶴寿らが旭山城に入って戦った。武田信玄も旭山城を軍事拠点として重視し、兵3,000、弓800、鉄砲300を入れて支援した。結局、旭山城は難攻不落のまま約100日もの間を守り通し、上杉方を大いに悩ませたと伝えられる。(『妙法寺記』等による。なお、この戦いは長期にわたったため、最終的に駿河の今川義元の仲介により、同年10月半ば、甲越両軍は和議に至っている。)

この戦いの後、永禄元年(1558年)、栗田氏は寺僧と共に善光寺本尊を奉じ甲斐の甲府に移り、栗田鶴寿は甲斐善光寺の別当となったが、天正9年(1581年)鶴寿は遠州の高天神城で戦死、永寿が後を継いだ。

武田氏滅亡後、栗田氏は上杉景勝の配下に属し、慶長3年(1598年)、景勝の移封に伴い会津に移った。栗田城はこの前後の時期(16世紀半ば~17世紀初め)に廃されたようだが、その正確な時期は定かでない。



第2回川中島合戦で栗田氏が籠城奮戦した旭山

埋蔵文化財調査

平成2年(1990年)、栗田城址の一部に「グランドハイツ東公園」マンションが建設されることになったのを機に、それに先立つ発掘調査が同年5月から6月にかけて行われ、翌年3月に調査報告書が作成刊行された。これは長野市内では初めてとなる本格的な中世城館跡の発掘調査であった。成果としては、700㎡以上の調査範囲(長野市大字栗田字東番場472-1番地)から、土壇(ゴミ捨て等の目的で掘られた穴の遺構)74基、溝址2ヶ所、無数のピット(建物の柱穴の遺構)、また13世紀から15世紀前半にかけて造られたと思われる中国産の磁器、瀬戸・美濃産の陶器、土器、古銭(永楽通宝など)など多数の遺物が発掘されている。

その後、平成5年(1993年)の2次調査(字東番場509番地ほか)、平成6年(1994年)の3次調査(字東番場561-1番地ほか)と連続的に発掘調査が実施され、それぞれ調査報告書が刊行されている。これらは調査箇所が栗田城の内郭跡から外れており、また発掘範囲が1次調査より狭かったこともあってか、出土遺物の数は1次調査に比べて少なかったが、遺物品目や推定年代等については1次調査時と若干の違いが認められる。



古瀬戸天目茶碗(右)と風炉(ふろ)の破片(左)



硯(すずり)



かわらけ

石臼



最近では平成25年(2013年)6月に、内郭跡の範囲内である栗田公民館の建て替えに伴う発掘調査が実施され、内郭を南北に分ける段差と、それに沿った柵の柱穴列の遺構、また15世紀前半頃の焼土層(火災の痕)が出土するとともに、磁器等の食器類や石臼、古銭、仏像(善光寺式阿弥陀如来金銅仏。栗田氏が善光寺別当であった事実と考え合わせると興味深い)等が併せて出土している。(平成26年3月、調査報告書刊行。)



平成25年(2013年)6月調査時における発掘状況

これら発掘調査の結果、1次・2次調査時に出土した焼物などの出土遺物の大部分の推定年代が13世紀から15世紀後半の物であったことから、その時点において従来考えられてきた栗田城の廃城時期(16世紀半ば～)との間に空白期間が生じる疑問が提示された。また3次調査においては、それまでの調査では見られなかった15世紀末～16世紀前半の遺物が出土しており、城の存続年代や構造を考える上で、また新たな検討課題が投げかけられたが、少なくとも現在の道路の形状等と併せ、往時の状況をかなり明確に推定できつつあるのは喜ばしいことである。

遺構と城の推定範囲

* 土 塁

前述のとおり、現在「水内総社日吉大神社」本殿が建つ高台が、内郭北西隅の土塁の遺構であり、平地からの比高約9m、長さ約40mと、近在に類を見ない規模を誇る。

今日、はっきりとした形で見ることのできる栗田城の遺構としては、これがほぼ唯一のものであり、貴重である。

また、近年までこの南東側にも内郭土塁の盛土が残存していたが、そこからは現在ではほぼ宅地化し、わずかに一部痕跡が認められるにすぎない。



内郭北西隅の土塁遺構(右頂部に建つのは「水内総社日吉大神社」)



内郭南の土塁の痕跡(やや盛り上がっている。)



外郭土塁の痕跡? (「円通院」)

その他、東の「円通院」西縁などに見られる盛り上がり外郭土塁の痕跡であるといわれてきたが、これについては異論(河西克造氏の見解、長野市の埋蔵文化財第61集『栗田城跡(2)』1994)もある。

* 堀 跡

内郭北西隅の土塁の外側(北～西)には、土塁の形状に沿った鍵形の堀の遺構が近年まで残存していたが、惜しくも昭和48年(1973年)に埋め立てられ、北は道路と駐車場、西は「日吉公園」になってしまった。

しかし、今も「日吉公園」南側の平地は雨が降ると湿気を含んでなかなか乾かず、かつてそこが堀であった事実を今に伝えているかのようである。



堀跡1(北側の道路と駐車場)



堀跡2(西側の「日吉公園」)

* 城の推定範囲

前掲の『長野県町村誌 北信篇』には、「東西六丁三十間餘(約702m)、南北十丁(約1,080m)回字形を爲す」とあるが、河西克造氏による「栗田城の地籍図による復原」(長野市の埋蔵文化財第61集『栗田城跡(2)』1994)によれば、「地籍図では栗田城の主郭と外郭が確認され、二重の堀で構成された複郭式の城館であることが判読できる。(中略)城域は約300m四方の範囲に構成された外郭までと捉えることができる。」とする。

これによれば栗田城の範囲は、東は「円通院」の西縁あたり、西は「北市通り」のあたり、南は「部屋田」のあたり、そして北は「栗田新道」のやや南あたりまでとなる。『長野県町村誌』の記述より狭いことになるが、それでもなお、これほどの規模を誇る城館は善光寺平では他に例を見ず、特筆すべき遺跡であるといえる。

栗田城址とその周辺の歴史探訪ガイド

ここに紹介した以外にも、栗田とその周辺には各種石造文化財など、多くの「歴史」があります。それらを訪ねて、町内をゆっくり歩いて回ってみてはいかがでしょうか？

中御所守護館 (漆田城) 址
室町時代に幕府が地方統治のため国ごとに置いた「守護」の館の跡で、栗田氏と争い攻略された漆田氏の居館(漆田城)跡との伝承もある

栗田城址
栗田城の東虎口(城の入口)付近にあり、境内西縁の盛り上がり栗田城の外郭土塁の遺構との説あり、栗田氏の守伝をまつた堂の跡ともいわれる。江戸時代には、かつて栗田氏の重臣だったという三戸部氏の持分であった

観音寺
栗田氏に攻められ衰亡した漆田氏の墓と伝わる宝篋印塔がある

悪源太義平の墓
鎌倉幕府を開いた源頼朝の父である源義朝の長男・義平の墓と伝う。久寿2年(1155)の「大蔵合戦」で叔父の源義賢を討ち、「強い」の意で「悪源太」と呼ばれる

旧北国街道
江戸時代の重要交通路であった。ここは善光寺宿と丹波島宿との間の区間にあたる

栗田村高札場
江戸時代に宛書を記した板札を掲げた施設(移築保存されたもの)

姫塚
姫塚は、源平争乱の際、「一の谷の戦い」(1184)で平敦盛を討った熊谷直実の娘・玉鶴姫を葬った地と伝う。玉鶴姫は、源平争乱後、世の無常を感じ、出家して善光寺で修行していた父・直実を慕い、遠く武蔵の熊谷から旅をしてきたが、犀川を渡ったところで病に倒れ、亡くなってしまった。それを知った直実は姫を葬るとともに、佛導寺を建てて姫の菩提を弔ったという

佛導寺

旧芹田村役場跡
明治22年(1889)発足、大正12年(1923)に長野市に合併消滅した芹田村の役場跡地

【参考文献】

- 『長野縣町村誌 第一巻 北信篇』(長野県編/1936年/復刊1973年・名著出版)
- 『善光寺平』(小林計一郎著/角川書店1967年)
- 『日本城郭全集 5』(大類伸監修/人物往来社1967年)
- 『善光寺さん』(小林計一郎著/銀河書房1973年)
- 『県史シリーズ 20 長野県の歴史』(塚田正朋著/山川出版社1974年)
- 『日本歴史地名体系 20 長野県の地名』(下中邦彦編/平凡社1979年)
- 『日本城郭大系 8 長野・山梨』(児玉幸多・坪井清足監修/新人物往来社1980年)
- 『長野県の中世城館跡 分布調査報告書』(長野県教育委員会編/1983年)
- 『近世栗田村古文書集成』(青木正義編著/銀河書房1983年)
- 『図解 文化財の見方 歴史散歩の手引』(人見春雄ほか編/山川出版社1984年)
- 『長野県史 通史編 第3巻 中世 2』(長野県編/社団法人長野県史刊行会1987年)
- 『角川日本地名大辞典 20 長野県』(角川書店1990年)
- 『長野市の埋蔵文化財第38集 栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡(3)』(長野市教育委員会1991年)
- 『城館調査ハンドブック』(千田嘉博・小島道裕・前川要著/新人物往来社1993年)
- 『長野市の埋蔵文化財第61集 栗田城跡(2)』(長野市教育委員会1994年)
- 『長野市の埋蔵文化財第68集 栗田城跡(3)』(長野市教育委員会1995年)
- 『定本 北信濃の城』(小林計一郎・湯本軍一監修/郷土出版社1996年)
- 『信州の城と古戦場 24版』(南原公平著/令文社1997年)
- 『長野市誌』(長野市誌編さん委員会編/長野市)
 - ・ 第2巻 歴史編 原始・古代・中世 (1997年)
 - ・ 第8巻 旧市町村史編 旧上水内郡 旧上高井郡 (1997年)
 - ・ 第12巻 資料編 原始・古代・中世 (2003年)
 - ・ 第16巻 歴史編 年表 (2005年)
- 『歴史探訪に便利な日本史小典 6訂版』(日笠山正治編/日正社2008年)
- 『縄張図・断面図・鳥瞰図で見る 信濃の山城と館 第2巻 更埴・長野編』(宮坂武男著/戎光祥出版2013年)
- 『栗田町内会たより 第26号』(栗田町内会2013年)
- 『栗田地区「歴史的な魅力ある重要物」と思われる物』(栗田まちづくり協議会 歴史文化研究部会編/栗田町内会2013年)
- 『栗田氏と戸隠神社・善光寺の奇しき因縁〜日吉神社参拝の栗(昭和47年 竹村太郎氏 誌)から〜』(栗田まちづくり協議会 歴史文化研究部会編/栗田町内会2013年)
- 『長野市の埋蔵文化財第133集 裾花川扇状地遺跡群 栗田城跡(4)』(長野市教育委員会2014年)